

束芋

たばいも
アーティスト

束芋『mushikakushi (02)』2008年
©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

作家の収入

@Basel

ものを作る作家にとって、収入があるときは作品が売れたときで、ただ作品を作るだけではお金は出ていくばかり。展覧会では設営期間の日当は出て、参加することでギャランティーをいただけるわけではない（作家によっては、作品を貸し出し、レンタル料という形で収入を得る人もいるが、それは基本的に作品を売らない人に限られているようだ）。

私の場合は、現地設営に3〜10日なので、日当が60000〜80000円として、一つの展覧会で通常は3万円程度、多くても6万円ほどで、滞在中の食事や交通費を賄うために支給されるそれは、収入として残るものではない。新作発表を前提とした展覧会では、制作に使える補助金は出るが、ほとんどの場合がそれ以上の制作費がかかり、ただ作品を作り発表するだけでは大赤字まっしぐらなのだ。定収入のない私のような作家は、このような連載を持つことや単発のお仕事で食いつないでいる。リアルな話、一年間に作品がまったく売れないとなると、その時点で食いつぶされるわけだ。

正直、私の場合、作品が少しずつ売れるようになったのは最近のことで、それまでは幸運にも、賞をいただくことで制作活動を続けることができた。新人育成とか若い作家への助成金を謳った数々の賞は、手分けして束芋という作家の制作活動を繋げてきてくれたのだ。

どこかで一つでも賞を落としていたら、制作活動は休止しフリーターをやっていたと思うし、作品が多少売れるようになった現在でも、フリーターに転身する覚悟を持っていないわけではない。とにかく

く、作家にとって作品が売れることは、作家を続けていけるといいうことで、非常に重要なことをわかっていただきたい。

そして、本題。先日、バーゼルのアートフェアに行ってきた。出品するのは今回が2度目だが、設営段階から参加し、作品が売られていくさまをしっかりと見せてもらうのは初めてだった。世界中のお金持ちが自家用ジェットでやってくるような場所で、2畳ほどのスペースを駆使しながら描いた私の作品が売られる。そんな面白い構図が立ち上がる、なんとも感慨深い場所だった。

言葉では表現できないような繊細な緊張感を持続させるために作り上げる展示空間とはまた違う趣で、札束がサブリミナルで挿入されるキラキラした緊張感が立ちこめている。そんな光景にクラクラしながらも、アートマーケットのリアルな世界は私にとってかなり刺激的で楽しめた。でも、これに飲み込まれてしまうと骨までグニョグニョになり、自分の足で立ってはいられないことも実感した。

自分の身の丈に合った活動を心がけて、自分の足でしっかりと立っていられるよう明日も頑張らなくては、と自分を奮め